Relay Essay ポコポコ poco-poco ⑨

ネグロスと歩んできた四半世紀

鬼木のぞみ／おにき・のぞみ
JCNC岡山、岡山市議会議員

JCNC岡山〈注1〉の軸は常に〝岡山〟に置いてきた。ネグロスとの交流の中で私たちが学び、私たちや地域社会が変わり、ネグロスと対等な付き合いができるようになることをめざして。

JCNCがめざした「砂糖キビ労働者から農民へ」の営みは、たやすいものではなかった。私たちの活動も同じで、駆け足で進むこともあれば、足踏み状態の時もある。ネグロスから〝元気〟をもらいながら一歩ずつ、歩んできた。

今年3月「カネシゲファーム・ルーラルキャンパス（KF-RC）開所式」に参加するため、6年ぶりにネグロスを訪れた。「のぞみがなかなか来ないから待ちくたびれた」と、笑顔で迎えてくれたのは、サンフリアン村のナナイ・ロセビン。JCNCの活動発足当初から携わってきた私の願いは、「ネグロスに友だちができること」と「村の人が育てた野菜で食事をすること」。活動開始10周年でロセビン一家と出会い、それから14年。今回はじめて、彼女たちが育てたナスの料理を心震えながら堪能した。

これが本当のスタートだと感銘を受けたPAP21〈注2〉の立ち上げから10年、JCNCは個人農家支援へと移行した。6年前、ロセビンに「PAP21がなくなっても、サンフリアンに来るのか」と問われ、「もちろん、友だちだから」と返した時の彼女のまっすぐな眼が忘れられない。彼女たちには彼女たちの願いと暮らしがある。PAP21なき後、どんな道を選択するのか…。ネグロスに想いを馳せつつ、私は私の想いを岡山の地で実践するのみ。この6年の間に私は市議会議員となり、在岡山のフィリピン人たちとの輪も大きく膨らんだ。

開所式に夫と子どもと参加したロセビンは、KF-RCから預かったヤギを飼い、砂糖キビ労働と、裏庭の畑で野菜を作っていた。そんなロセビンの姿が、素直に嬉しかった。ネグロスと出会って四半世紀。苦しい時代に育った子どもたちが村作りの中心となってきている。新しい芽が、ネグロスでも日本でもスクスクと伸びるよう、ともに手を携えていきたい。岡山のメンバーたちと家族ツアーを実現させたいなぁと思っている。■

〈注1〉JCNC岡山：全国に広がった日本ネグロス・キャンペーン委員会（JCNC）のネットワーク団体のひとつ。
〈注2〉PAP21（21世紀に向けた民衆農業創造計画／現地NGO）：砂糖労働者、零細農民、都市貧民層、零細漁民をつないで、循環（経済、環境、地域）のある農業・地域づくりをめざしたNGO。

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちらこちらに"ポコ"（水たまり）が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

CONTENTS ■ HALINA 09 2010.08.01

02	Relay Essay ポコポコ⑨ ネグロスと歩んできた四半世紀◎鬼木のぞみ
03	[特集] **日本の海外開発援助、そのあり方を現場から問う** 政権交代で日本のODAは変わったか◎越田清和 レポート メコン流域開発の現状とODA◎満田夏花 フィリピン・ヌエバビスカヤ州サンタフェにおける サボダム・パイロットプロジェクト◎モイセス・ピンドッグ
08	［Topics］ カネシゲファーム・ルーラルキャンパス 第1期研修生たちの14ヶ月◎秋山眞兄 水俣病から解放されたい加害者たち◎谷 由布
10	［Column］ しらたか便り③ 白鷹山で初吟行◎疋田美津子 むらを歩く⑨ 一瞬のにぎわいが戻り消えた◎大野和興 まだまだ韓流③ ドラマの裏を知ればもっと楽しい!?『彼らが生きる世界』◎大江孝子 Have you ever seen the Cinema?③ 『ショコラ』◎重政栄一郎
12	撮っておきアジア⑨ パレスチナ自治区ヘブロン◎天明伸浩
13	APLA生活⑨ マスコバド糖のある贅沢な生活◎桝本百々子
14	［Voice from APLA partners］ 【ネグロスより】カネシゲファーム・ルーラルキャンパス（KF-RC）の適正技術 "APLA Forum 2010 感じるアジア"が無事開催されました。
15	事務局便り

表紙のことば

これは、約10年前、学生時代に研修で訪れたタイで1日だけホームステイをしたときに、ホストマザーがくれたスカートの一部に施された織りである。確かチェンマイの郊外の村へ行ったのだと思うが、今となっては地名がどこだったか覚えていない。でも、このタイの研修で自分の人生の舵が大きく右から左に切られたことは間違いない。日本での自分の生活がタイの人びとともつながっているのだ、ということを体験した出来事だった。

久々に取り出したこのスカートを見ていたら、おぼろげな記憶を思い出してきた。夜の歓迎会にいただいたスカートを着ていったこと、縫い目などからして手作りのスカートなのだと思うが、それを着せてくれたお母さんのやさしさ、朝早く起きて油たっぷりの中で焼くタイ式（?）目玉焼きを作ってくれたお父さんのこと、など。もう会うことはないのだろうけど、元気だろうか。このスカートで自分を変えた春のことを思い出した。（吉澤真満子）

フィリピン・ヌエバビスカヤ州のサボダム建設現場。（P7参照）

特集

日本の海外開発援助、そのあり方を現場から問う

日本の海外開発援助は、本当にそこに住む人びとのためになっているのか。今号ではODA（政府開発援助）を含む日本の開発援助のあり方と実態をさぐった。なにより問題なのは、「日本の政府開発援助のあり方そのものが日米安保＝日米同盟に規定されていること」と越田論文は指摘する。さらに、いま注目を集めているメコン川流域開発とフィリピンのダム建設現場からの報告では、国内の公共事業削減や投資抑制による事業や収益の減少を国外進出で取り戻そうとする大企業の権益確保に開発援助が利用され、ゆがめられている実態も浮かび上がった。（編集部）

政権交代で日本のODAは変わったか

越田清和／こしだ・きよかず
ほっかいどうピーストレード事務局長

民主党政権ができた時に何を期待したのか、今となって思い出すのは難しい。2010年5月28日、辺野古に新基地建設を進めるという新しい日米共同声明に合意したことで、怒りばかりが先に立って、「政権が代わって良かった、自民党政権には絶対に戻したくない」という気持ちがどこかへ行ってしまったからだ。日米共同声明のお先棒をかついだのは、おそらく外務省だろう。

外交政策とODA政策

外務省はODA（政府開発援助）も統括している。一方で軍事同盟を強めながら、もう一方で「平和的な手段で世界の平和と安定に貢献」するための「必要不可欠な政策手段」としてODAを強調する（『ODA白書2009』、3ページ）。外務省はODAについて「日本外交の基盤を強化するもの」と言うが、自民党・民主党を問わず「国是」としている日米同盟（菅直人新首相は「国際的な共有財産」とまで言っている）のあり方、というより根本的な「外交基盤」、もっと言えば「無外交基盤」については全く触れない。

米国に従うだけの外交政策の枠組みの中でODA政策も決められているというのが、日本のODAの第一の特徴である。したがってここが変わらなければ、日本のODAが根本から変わることはないと私は考えている。鳩山前首相が

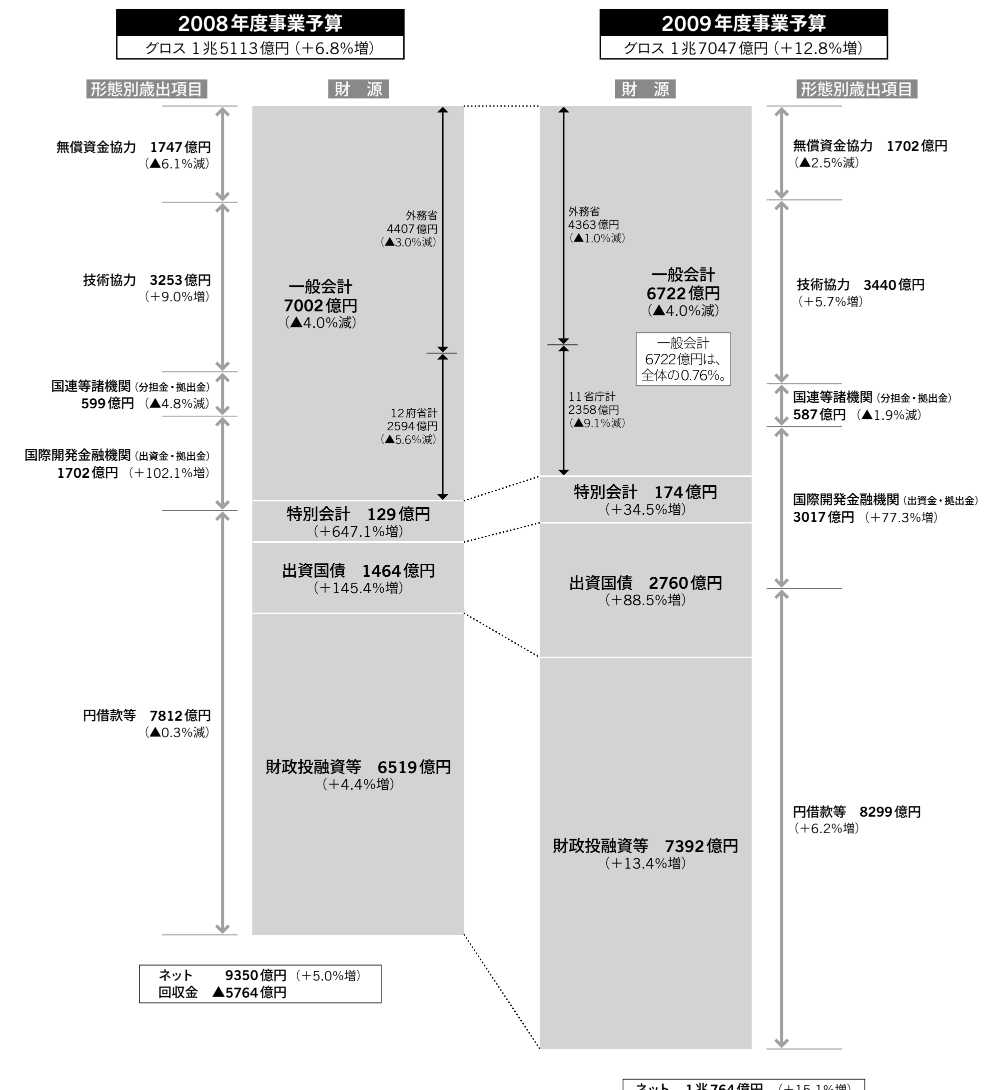
どこまで自覚していたかはわからないが、「緊密かつ対等な日米関係」を打ち出した時には、米国と一定の距離を取ろうとしているように見え、そこに期待したいと思った。しかしこの期待は完全に裏切られた。

ODA予算の事業仕分け

日本のODAのもう一つの特徴は、公共事業などと同様に、政・官・財の癒着構造の中でプロジェクトが決まっていくことだ。民主党政権はこの構造を変えようとした。自民党政権ではできなかったことだ。「ハコモノからヒトへ」というスローガンは、経済インフラ整備によって「途上国」の経済成長を進めようとしてきた日本のODAのあり方を見直すことにもつながるものだった。

2010年度予算の無駄を点検するために行われた行政刷新会議（民主党議員や民間人がメンバーとなった「事業仕分け」）では、ODA予算も見直され、2008年10月に発足した新JICA関連の予算が対象となった。1571億円の予算がつけられた無償資金協力援助のハコモノ（経済インフラや学校・病院などの建造物）支援の見直しが求められ、予算の3分の1削減が決まった。ODAによるハコモノ建設が、現地の住民のニーズに合っているかどうかが疑わしいというのが、削減の理由だ。無償資金によるプロジェクトがどう決められているのかという選定プロセスについても問題が指摘され、プロジェクト発掘を手がけているコンサルタント会社と外務省の癒着も指摘された。またODA受け取り国政府の必要とする商品を輸入するための資金を提供するノンプロジェクト無償についても、その商品の売却によって得た資金の使い道の透明性などが問題になった。

政府開発援助事業予算の財源と援助形態別歳出項目



※四捨五入の関係上、合計に不一致があります。
データ出典：2009年度版政府開発援助（ODA白書）

財政刷新会議の指摘した問題は、ODA改革を求めてきたNGOなどが指摘し、その改善を強く求めてきたものである。その意味ではODA改革の第一歩と言ってもいいだろう。

しかし、このODA予算の見直しが、ODAの抜本的な見直しにそのままつながるとは言えない。

円借款と癒着構造

それは、日本のODAの第三の特徴である円借款の問題（日本のODA予算1兆7047億円の50%近い8299億円を占める）についてはまだ何の検証もしていないからだ。自民党政権は国内向けにはODA予算を含めた予算削減を打ち出しながら、対外的には「5年間で100億ドル（約1兆円）のODA増額」を2005年のグレンイーグルズ・サミットで公約した。この矛盾を「解決」するために考え出されたのが、「円借款（有償資金協力）の活用」なのである。

この円借款をめぐる政・官・財の癒着構造（日本企業の投資のためのインフラ整備など）と無駄遣いを正面から検証する方向へ踏み出さなければ、財政面からみたODA改革には結びつかないはずだ。ところが、この点について民主党政権に期待できるのかどうか、よくわからない。というよりも、あまり期待できない。なぜなら、ODAを使ってエネルギーやレアメタルのような鉱物を確保し、あわせてアジアを中心に鉄道や原子力発電所などのインフラを輸出しようとする方針が、民主党政権によって打ち出されているからである。

この動きの背後にいるのは、巨大民間企業である。経済産業省は2009年7月に「レアメタル確保戦略」をまとめ、「途上国での民間企業の権益獲得を後押しするため、政府の途上国援助（ODA）を活用して鉱山周辺に鉄道や道路を整備したり、国際協力銀行などの融資を受けやすく」することにした（朝日新聞09年12月25日）。また、大豆やトウモロコシなどを確保するために、中南米などで生産を拡大する商社などにODAを使ってインフラ整備をする計画も進めようとしている。そして、菅内閣が打ち出す「新成長戦略」の柱は、インフラ整備をアジア諸国から受注しようというものである。

こうしてODAや国際協力銀行を通じた融資が「戦略的援助」となって、巨大民間企業による資源や食糧の購入やインフラ輸出受注のための手段として使われていくようになる。これは、長く批判されてきた「貿易・投資・援助の三点セット」の再現ではないか。つまり、日本の援助は何も変わっていないということになる。政治が変われば援助のあり方も変わるはずだったのに、どこで間違ったのか。2003年の新ODA大綱、翌年のODA中期目標を見直すところから始める必要があるのではないだろうか。■

レポート Report

メコン流域開発の現状とODA

満田夏花／みつた・かんな
メコン・ウォッチ

メコン流域では、「成長するメコン」をキーワードにODAを用いた大規模インフラ開発が進められている。2009年11月に開催された日メコン首脳会議では、鳩山首相（当時）は、メコン地域に「今後3年間で5000億円のODA支援」を約束した。この巨額のODAは、この地域に何をもたらすのだろうか。

「貧困削減」のまやかし
～ラオス・ナムトゥン2水力発電事業

ラオスやベトナム、カンボジアの農山村部において、伝統的に人びとは森林や河川の自然生態系に生活の基盤を築いてきた。木の実、きのこ類、樹液、薬草、はちみつ、ラタン、建材などを提供する森林は人びとの食糧庫でもあり、薬箱でもあった。

援助がもたらしたダムや道路によって森林や河川が破壊された結果、たとえ現金収入が倍増したとしても、人びとはさらなる現金収入がないと成り立たな

い経済に立ち向かわざるをえない。開発によってもたらされた近代的な経済の中で、かえって貧困化する人びともでてくる。

例えば、ラオス・ナムトゥン2ダム。世界銀行やアジア開発銀行（ADB）の支援を受け、ラオス中部で建設が進められている水力発電ダムである。総事業費はラオスのGDPの約5割。タイへの売電による外貨獲得による「貧困削減」を目的としているが、約6200人の立ち退きが発生。竹、筍、樹脂などの森からの産物の採取・販売、水田・焼畑農業、小規模な伐採や狩猟を生計手段とする住民は、以前の生活の糧を失った。たとえ補償金や貯水池漁業などの支援を受けたとしても、彼らが長期的に生計回復することができるかどうかは疑問である。これに加え、下流の水量の変化、水質の悪化、河岸農業・漁業などの生計手段への悪影響がすでに現実化してきている。

メコン流域におけるODA問題

下記にメコン流域におけるODAに関連する諸問題を列記した。

ダムに沈む前のナムトゥン川の光景。

←移転住民に与えられた補償農地。実施企業は換金作物栽培を推奨しているが、マーケットがなく、非持続的な焼畑による米作が行われている。（2008年4月）

→ダムからの放水によって水没し、放棄されたセバンファイ川沿いの野菜畑。商業運転開始までに補償が完了していない。（2010年5月）

《タイ》日本のODAで整備され、日本企業の海外進出の受け皿となった東部臨海工業地帯のマプタプット地区では、90年代から大気汚染、悪臭、水質汚濁が深刻化し、周辺の住民が被害を受けてきた。同地域はようやく昨年、同国の公害管理地域に指定された。

《カンボジア》都市部を中心に強制立ち退きの問題が社会問題化しており、それを憂慮した世界銀行、ADBや各国ドナーが昨年7月16日に、「カンボジアの都市貧困層への立退きの停止を求める」と題する声明を発出。多くの国々が名を連ねる中に日本政府の名前はない。一方で、日本政府は、昨年、大規模な住民移転をともなう国道1号線改修事業、第2メコン架橋建設事業への無償資金協力の供与を決定。無償資金は、本来、保健や教育等に供与されるが、その20件相当分以上が国道、架橋建設事業費に充てられる。

《ビルマ（ミャンマー）》日本政府は、ビルマの天然ガス開発に権益を持っている日石ミャンマー石油開発へ出資しているが、軍事政権は天然ガス輸出からの収入を軍備拡大に使っていることの間接支援となっているという面もある。

《ベトナム》大型の道路・港湾・水力発電建設事業など、大規模な非自発的住民移転を伴う事業が数多く支援されてきた。その規模は、ときに一事業で数千世帯にのぼることもあり、都市の貧民層および山岳部の先住・少数民族に生活の激変を強いてきた。

日本がベトナムに多額の援助を供与し続けている傍ら、ベトナム自身が周辺国に積極的に投資を行い、問題案件の資金源となっている。例えば、ベトナム電力公社が投資するカンボジアのセサン1、セサン2水力発電事業などが該当する。

大規模ODA案件の弊害は、個別案件の環境社会影響にとどまらず、当該国の政治・社会構造のゆがみを助長することにもつながる。日本政府は、過去のODA事業の問題点から十分学ぶべきであろう。■

レポート Report

フィリピン・ヌエバビスカヤ州サンタフェにおけるサボダム・パイロットプロジェクト

モイセス・ピンドッグ／ Moises Pindog
サンタフェ有機生産者組合マネージャー

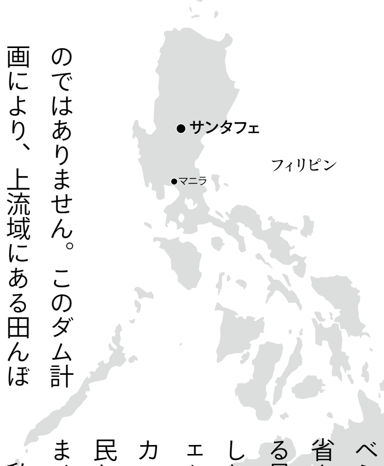
1990年7月16日、大地震がフィリピン・ルソン島北部一帯を襲いました。ヌエバビスカヤ州サンタフェも大きな被害にあい、山の斜面の地すべりなどが発生しました。毎年この地域は大型台風も通過し、そのたびに鉄砲水や低平地の土砂災害の被害が続いてきました。川岸沿いに位置するバラクバク地区の住宅や田んぼは、岩や砂がたまり、人びとは高地へと避難してきました。

大地震から20年が経過した今でも、低地の農業用地やサンタフェ橋（川との高低差が1メートルしかない）がある地区では、鉄砲水や土砂災害が依然として大きな問題となっています。そこで、フィリピン公共事業道路省は、サンタフェ橋を守るため、上流からの土砂をせき止める砂防用のサボダムの建設をバラクバク地区に打ち出しました。

このサボダム・パイロットプロジェクトは、財政、技術共にJICA（独立行政法人国際協力機構）から支援を受けています。今回のこのJICAのパイロットプロジェクトは、既に日本で実験され、フィリピンでも応用できるかを試みるものです。鉄筋強化などはなく、岩、砂、セメントが用いられるダム建設です。このプロジェクトは約1500万ペソ（約3300万円）の予算規模だとサンタフェ市の技術者ディオニシオ・メハレス氏は語りました。

JICAのプロジェクトが守ろうとしているサンタフェ橋。

建設が始まったサボダム。



公共事業道路省は、数千万規模のプロジェクトを誘致し、これは多くの人びとが恩恵にあずかれると大々的に宣伝しました。しかし実際には、地元住民にとってこのプロジェクトは、それほど前向きに受け入れられるものではありません。このダム計画により、上流域にある田んぼが水浸しになってしまった場合に誰がそれを保障してくれるのか、イムガン地区の唯一の入り口となっている川の脇を通る道路が土砂により封じられた場合の対応はどうなるのか。こういった住民側からの不安は、バラクバク村長のシト・ブグトン氏より地元住民側との相談会で述べられましたが、公共事業道路省やJICA側からの納得できる具体的な説明はありませんでした。住民に対してこのプロジェクトを積極的に説得していたカルロス・パディラ議員も、住民たちを安心させることはできませんでした。

私たちサンタフェの人びとにとって、この公共事業道路省とJICAが進めるサボダム・パイロットプロジェクトは、特に土砂災害に関しては、問題に対する表面的な対策でしかないのではないかと考えています。サンタフェ川にサボダムが建設されたとしても、鉄砲水や土砂災害は治まらないと思います。山の斜面が既にむき出しになっているからです。もし、1500万ペソがこのサンタフェ盆地全体の回復に使われ、様々な種類の木々を植林すれば、より筋が通り、コストもかからず、持続可能で環境保全にもつながります。持続可能な開発こそが、私たちの子孫にとっても有益となり、実際それは、人類全ての子孫にとって有益であると考えます。（訳：吉澤真満子）■

カネシゲファーム・ルーラルキャンパス第1期研修生たちの14ヶ月

秋山眞兄／あきやま・なおえ
APLA共同代表

この9月に、カネシゲファーム・ルーラルキャンパス（KF-RC）の第1期農業研修生6名の卒業式が執り行われる。昨年7月に開設され、研修生の第一番の仕事は、荒れた畑と壊れた豚舎や寝る場所やトイレなどの整備であった。それから14ヶ月、彼らは野菜作り、養豚、堆肥作りなどの農業技術の習得はもちろん、人間として大きく成長したに違いない。

畑がまがりなりにも整備された昨年8月下旬に出会った時には、未だ学生のワークキャンプという雰囲気だったが、3月に出会った時にはかなり変化していて、密やかではあるが農業にたずさわっていることへのプライドが感じ取れた。それは、農業技術習得だけではなく、地元から日本などの海外までの様々な人びととの出会い、そして何よりも同世代の仲間との寝食から仕事まで一緒に暮らすという、生まれてからこれまでにはなかった様々な体験を、たった1年足らずにしたことが大きく影響しているに違いない。研修生たちはこう語ってくれている。

「今までは親に反抗したり、農業なんてしたくないと思ったときもあったけど、土地がどんなに大切なものか、大事に野菜を育てれば毎日収入があることも学んだ。もう、両親に頼って生活することを卒業して、今度は両親のために農業をします。」（フィデル・23歳）

「地主がいる農園でも、マニラで働いたハンバーガーショップでも、僕の時間は全部コントロールされ、命令された仕事をするだけだった。農業は誰からも指示を受けず、時間も自分で決められる。僕は初めて、野菜や豚や鶏も心を込めて世話をすることの大切さを学んだ。」（エリマー・20歳）

「僕は小学校の初めから学校がいやで、2年で学校を辞めて、父の畑仕事を手伝いました。農業をやることが本当に好きでした。あんなに学校がいやだったのに、今は、小学生の農場見学で学校の先生に僕が説明するなんて考えたこともなかったです。」（レイマーク・17歳）

「研修生それぞれの畑をもらい自分たちで計画して野菜を作り、それが毎日売れました。母に何度かお金を渡しましたが、そのたびに泣いてお礼をいわれました。第2の家族と思える仲間や農場の人たちに出会え、日本人ともたくさんの友達ができました。」（ジョネル・19歳）

「父は土地闘争、協同組合、畑の仕事でいつも忙しかったのに、僕はほとんど手伝っていなかった。土地があることがどんなに大切なことか。今度は僕たちがその土地を守り、たくさんの作物を作っていきたい。自分で責任を持つという大切なことを学びました。」（レドハン・24歳）

「大学の勉強を続けながら研修生となり、両立が難しいときもありますが、農村で生きる人びとにとっての農業の大切さを学んでいます。そして、自分自身が責任を持って生きる人間になったと思います。」（ローランド・20歳）

そして彼らは、KF-RCは自分たちのように満足に学校へ行けず農民になるしかなかったものにチャンスを与えてくれる、僕らのようにもっと多くの青年がこの農場で自信と希望を持ってもらいたい、と語っている。この秋にようやく最初の卒業生が生まれ、次の研修生がやってくるという始まったばかりの小さな研修農場ではあるが、ネグロスの農民と一緒に、焦らず、そして確実な歩みを重ねていきたいと願っている。■

野菜の手入れをする。

豚の世話も大事な仕事。

※研修生のレポート全文はAPLAホームページで読むことができます。http://www.apla.jp/04/negros/negros_100625_02_01.html

水俣病から解放されたい加害者たち

谷 由布／たに・ゆう
水俣ほたるの家

水俣病が公式に確認され、今年で54年。すでに半世紀以上が過ぎている。しかし、いまだ被害者の声はやまず、事態が動き続けている。問題は数多くきりがないが、今回は特に、最近急速に事態が動いている加害企業の分社化を中心にお伝えしたい。いまだ被害者は怒りをもたずにはいられない状況にある。

チッソの分社化が意味すること

2009年7月8日、国会で、「水俣病被害者の救済及び水俣病問題の解決に関する特別措置法」（以下、特措法）が成立した。

しかし、この法律に対して、多くの被害者が強く批判の声をあげていたことをご存知だろうか。救済のための法律とあるにもかかわらず、この法律は、被害者救済ではなく、加害企業であるチッソ株式会社（以下、チッソ）の分社化に関して詳しく規定するものだった。分社化とは、簡単にいうと、チッソがあらたに事業会社を設立し、水俣病の賠償債務や公的支援の借入金債務を除くすべてを事業会社に譲渡、事業会社の儲けや株式売却益を原資にして、水俣病の賠償を終えるとチッソは消滅する、というものである。これにより、事業会社は、水俣病被害の責任を負うことなく事業活動を行うことができる。この分社化はチッソが長年望み続けてきたものだ。今年、社内の冊子の念頭挨拶で、チッソの後藤会長はこの分社化によって、水俣病という「桎梏から解放」される、と述べた。

被害者は被害者であることをやめられないのに、加害者は法律によって、水俣病から解放され、自由に利潤を追求していこうとしている。

いまも裁判を続ける水俣病被害者互助会。

まず住民の健康調査を

水俣病の被害は、いまだその実態が明らかではない。被害者は、水俣病の被害地域、不知火海沿岸の住民に対する健康調査を長年求めてきた。水俣病のイメージは重症の人が強く、軽度の症状を持つ人はなかなか自分が水俣病であることを自覚できない。また、水俣病が起きたことで生まれてしまった地域の亀裂はいまだ根深く、申請をためらい、怖れる人も多い。このような中で、被害者自身からの申請を待つことは、被害者の切捨てにつながる大きな問題であり、被害者の可能性がある地域住民に対しての健康調査は本来迅速に行われるべきものだが、いまだに実現していない。潜在的な被害者がいる中で、加害者が賠償債務を負わない立場を得るということは、今後新たに被害を認識して、訴えても、加害企業にその責任を負わせることができなくなってしまう。加害者である国、県、チッソは、加害企業の分社化手続きを進めるより先に、まず住民の健康調査を行い、被害の全体像の把握に努めるべきだ。

しかし、実際にはこの分社化の手続きは非常に迅速に進んでいる。今年7月6日には、特措法に基づく分社化手続きの一段階として、環境相はチッソを「特定事業者」へ指定した。これを受けて、チッソは事業再編計画を作成、これを環境相が認可した場合、実質分社化が可能になってしまう。

真の解決のために

現在、この分社化に対して、3月には被害者16人が日本弁護士連合会へ人権救済の申し立てを行い、6月には被害者7団体が抗議声明を出すなど、被害者からは反対の声が強くあがっている。

現在も裁判を続け、分社化にも反対している水俣病被害者互助会の会長である佐藤英樹さんは、「責任を逃れることは許されない。きちんと追及していく」と語る。

加害企業チッソが、同じく加害者である国によって、その責任を法的に逃れようとしているような状態では、いつまでも真の解決は不可能だ。命を奪い、健康を奪い、生活を奪い、海を奪い、多くのものを奪っていった加害者たちは、いい加減、被害者と真摯に向き合い、償いきれない罪をみつめてほしい。■

01 しらたか便り 03
Shirataka-dayori

疋田美津子／ひきた・みつこ
APLA共同代表、しらたかノラの会

白鷹山で初吟行

3年前に地元の仲間で句会を始め、月に一度、句を持ち寄り、互いに評する場を持っている。農作業のこと、旬の食べ物のこと、自然の風物など、句の題材には事欠かない。主宰者は句暦20年の芳賀則政さん。自身は日本俳句会の重鎮、金子兜太氏の主宰する句会「海程」の会員でもある。

5月15日、芳賀さんの提案で町の北端にある白鷹山で吟行することになった。吟行とは野山や名所に出向き、その場で句を作り、句会を開く行事のことだ。

朝10時、スキー場になっている白鷹山の麓に集合。そこから標高994メートルの山頂をめざした。水芭蕉の群生地、雪の重みで湾曲した杉木立、飯豊山の絶景を眺望できる場所など、残雪を踏みしめながら、木の芽を愛で、鳥の囀りの心地よさを味わいつつ、句の題材を拾ってゆく。頂上に着いたのはお昼過ぎ。持参したおにぎり、漬物、お茶を味わいながら、頭の中は言葉並べの真っ最中。

白鷹山の歴史は古く、奈良時代に高僧行基が訪れ、虚空蔵菩薩を奉ったと言われている。冬に雪を頂いたその姿が羽を広げて飛ぶ白い鷹のように見えることからこの名がある。上杉藩の北の砦であり、江戸時代の名君、上杉鷹山はこの山からその名前を採った。山の反対斜面にはパラグライダーの基地があり、色鮮やかなグライダーが空を舞っている。

山頂は寒く、下山して、麓で句会を開くことになった。一人三句を投句し、名前を伏せたまま各句をそれぞれが読み、その中から自分の気に入った句（自分の句は選ばない）を三句選ぶ。それを読み上げ、その時、句名乗りをする。即興の句づくりにしてはまずまずの出来なのでは…

囀りに導かれゆく初吟行　／祐子
赤・青・黄トンビ飛び立ち山笑ふ　／美智子
残雪に五十路を残す獣かな　／信吾
何処への道標かな水芭蕉　／美津子
マチュピチュと聞きなす小鳥雪解川　／則政

町内のメーンストリートから白鷹山をのぞむ。

しらたかノラの会の商品が買えます。お問合せ先：0238-85-5675（めぐり屋内）

02 むらを歩く ⑨

大野和興／おおの・かずおき
農業ジャーナリスト、本誌編集長

一瞬のにぎわいが戻り消えた

田植えする若者。

島根県西部、広島県境の山村、弥栄村（現在は浜田市弥栄町）小角地区に、久しぶりに若者たちの声が響いた。浜田市にある島根県立大学の学生たちが、田植の手伝いにやってきたのだ。88歳になった今谷さんは、昨年2反、今年残った3反の田んぼをやめた。後を誰かに頼みたいのだが、まわりも年寄りばかりで、みんな自分の田んぼを持て余している家ばかり。このままだと耕作放棄状態になってしまう。

相談を受けた公民館勤めの女性が引き受けたが、農業経験はまったくなく、見かねた地域の現役の百姓が田植え機やトラクター込みで加勢を申し出てくれ、田植や草取り、稲刈りは学生たちが応援に駆けつけてくれる。5月29日はその田植の日。普段は人影もほとんどない段々田んぼに一瞬の賑わいが戻り、消えていった。

弥栄村を訪れたのはかれこれ45年ぶりである。高度経済成長の走りの時期で、農村から大量の労働力流出が始まっていた。弥栄村は日本で一番早く挙家離村が始まった村といわれている。挙家離村とは、家を捨て一家で村を離れる現象をいう。経済成長が続く中で中国山地を背後に控える瀬戸内海沿岸は、次々と臨海部に石油コンビナートや鉄鋼などの産業が立地、膨大な雇用が生まれた。60年代半ば、中国山地を歩くと、〝人買いバス〟という言葉をたびたび聞かされた。朝まだ暗いうちにマイクロバスが集落までやってきて、人を次々吸い込み、臨海部の工場地帯に運んで行く。その光景を村の視点で表現した言葉だ。炭、薪という山村の経済を支えた産物も、プロパンガスへの転換という暮らしの中でのエネルギー革命で不要になり、山の暮らしが成り立たなくなった。

かつて46戸あった小角地区も今は13戸。高齢世帯ばかりだから、この先、地区そのものが消滅する恐れさえある。機械を駆使して今谷さんがやめた田んぼを支えてくれている現役百姓自体、今年76歳になった。これでも地区では若手なのだ。

このコーナーは『KAJA』のメンバーの方たちに交代で書いていただいています。

03 まだまだ韓流 03

大江孝子／おおえ・たかこ
KAJA（Korea And Japan Alternative learning group）会員

ドラマの裏を知ればもっと楽しい!?『彼らが生きる世界』

（C）YEG

今回は、ドラマミニシリーズからひとつ紹介します。『彼らが生きる世界』（2008年・KBS・全16話）は、テレビドラマ制作現場を舞台に、そこで働く監督、俳優、AD、脚本家などの人間模様を、主役の監督ジオとジュニョン2人の恋愛に絡めて描いています。

多くの人の力によってドラマが作られてゆく過程は、華やかな作りものの世界というより、過酷な労働現場。監督は美しい想像のシーンを思い描くが、脚本家はシナリオ執筆に苦しみ、ADたちは下働きでこき使われ、天候や突発的事故でロケ地がくるくる変わり、主役を支える俳優たちは脇で長時間待たされる。さらにテレビ局側と監督含め制作する側の、予算配分やら配役交渉をめぐっての虚々実々の駆け引き、一触即発の対立…。

視聴率がとれるかとれないかが唯一の評価基準になりがちな厳しい世界で、数字だけでは作品は作れない、人は動かせないことを、人生や生活を背負った生身の人間の物語でリアルに見せてゆきます。

一方、トレンディドラマのように始まるジオとジュニョンの恋。2人の過去や家庭環境の違いなどが絡み合って一進一退、ズキンとするような互いのモノローグが続く。若い2人とは別に、もうひとつ進行するテレビドラマ局長とトップ女優の再びの恋。裏切られてもなおの大人同士の恋がいじらしいほど表現される。この作品は、男女の繊細な心のひだが描かれたドラマでもあるのです。また、ベテラン女優たちが時にわがままに振る舞いながらも、後輩の女優や新米女性監督に対する忠告・眼差しは愛情に満ちている。女が一人で生きること・女が一家を支えていくことへの覚悟や哀しみが見え、「女へのエール」とも感じられる描き方です。

きらびやかでお洒落な虚飾の世界だけでなく、飲み屋の喧騒の中、田舎で牛を飼うジオの両親の会話の中にも韓国社会の断面が垣間見られる。そこにも目配りして、ドラマ制作の裏側を楽しんでください。

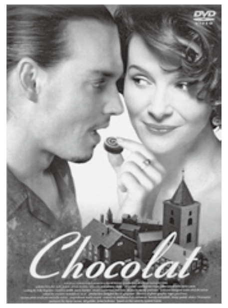
04 Have you ever seen the *Cinema*? あの映画を見たかい？ 03

『ショコラ』（2000年、アメリカ）

【監督】ラッセ・ハルストレム　【出演】ジュリエット・ビノシュ、ジョニー・デップ

重政栄一郎／しげまさ・えいいちろう
エディトリアル・デザイナー

村に持ち込まれたモノが例えば…



『ショコラ』
発売元：アスミック
価　格：アスミック・タイトル ¥1,890（税込）シリーズ
©2000 MIRAMAX FILM CORP. ALL RIGHTS RESERVED.

フランスのとある小さな村に、幼い娘を連れた女性ヴィアンヌが現れる。彼女はチョコレート店を開店。伝統・規律を重んずる村人、特に村長のレノ伯爵と軋轢を起こしながらも、甘いチョコレートの味と香りとともに閉鎖的で退屈な村と村人の心に新たな文化の息吹を吹き込む……。

村は確かに窮屈で時代遅れの因習や戒律に縛られ、実は多くの村人はそれに辟易している。そしてヴィアンヌ母娘が違法行為や迷惑行為を犯すわけではない。しかし彼女は「郷に入っては…」という考えを端から持ち合わせてない。先住民に疎まれ、摩擦・対立が起こるのは至極当然だ。

彼女は最初、無料でチョコレートを来客に与える。その魅力と誘惑を足がかりに、村人たちが常日頃抱える不満や不信など心の隙間に分け入り、馴染みを深め、売上を延ばす。

もし、そこで村人に手渡されたモノがチョコレートではなく、それが例えば麻薬などであったら…。はたまた、村に持ち込まれたモノが例えば賭博であったり、ポルノであったり、銃であったり、カルトであったり、怪しいもうけ話であったら…。

もし、村の有り様が変貌し、賑々しい看板や落書き、ゴミ、騒音、騒動が日常風景となったら…。よそ者が跋扈し、村のコミュニティが崩壊したら…。歳をとった村人たちは〝古き良き時代〟を懐かしみ、こう口にするだろう、「昔は良かった」。この美しい村には秩序正しい静かな暮らし（＝平和）が存在するのである。

人、モノ、情報の行き交いは、社会や文化に変革への刺激と一層の豊かさをもたらす。ヴィアンヌ母娘とこの村の出会いは双方にとって幸福であった。しかし、シチュエーションがちょっぴり違っていたら、レノ伯爵は邪悪と闘う英雄である。それは、排外主義と紙一重の差しかない。

古くからの伝統も生活も、そして人びとの意識も常に時代の流れ・変化にさらされ、逃れることはできない。何を受入れ、何を拒絶し、その上でどんな新たな文化を築くのか、世界中あらゆる土地で問われている。

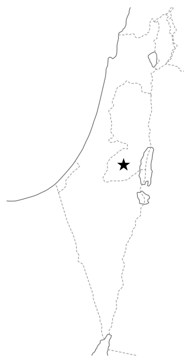
大団円のなか、流浪の被差別民が一人、この村に定住を決める。村はまさに変わり始めたばかりである。

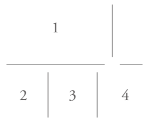
撮っておきアジア

Totteoki ASIA

09

撮影者◎天明伸浩／てんみょう・のぶひろ
撮影場所◎パレスチナ自治区ヘブロン





1 ── 紀元前1700年ごろ、すでに歴史に名前が出てくるパレスチナの古都ヘブロンの旧市街は、イスラエル人入植者により占拠されています。かつてはパレスチナ人が多く住んでいた街です。ところがその近隣にイスラエルは入植地を作り、バリケードを作って交通を遮断してパレスチナに圧力を掛けているのです。

2 ── ヘブロンの街路には人影はありません。

3 ── 町中で商店を営んでいた家の上部に新たに勝手に増築をしてイスラエル人が住み始める。私たちには想像もつかないことが罰せられることなく行われているのです。そんな街では上階に住んだイスラエル人が地上を歩くパレスチナ人に石を投げつけたりゴミをぶつけたりするために、頭上に金網のネットが張られています。金網で道を歩く人を守っているのです。

4 ── 私たちが訪ねた日にも、家の上に作った監視小屋から小銃を構えたイスラエル兵士が町を見下ろし、にらみをきかせていました。

（2010年2月撮影）

このコーナーでは皆様の写真を募集しています。

募集内容◎アジアを旅した写真5枚程度（日本も含みます） 詳しくはAPLA／あぷら事務局（TEL:03-5273-8160）までお問い合わせください。皆様からの応募をお待ちしております！

APLA生活 09

今回のお題

マスコバド糖のある贅沢な生活

レポーター
桝本百々子／ますもと・ももこ
山のハム工房 ゴーバル
岐阜県恵那市串原

山のハム工房ゴーバルが始まったのは今からちょうど30年前のことです。主に2つの家族が共同生活をしながら、生活の一部のようにして手作りのハム作りが始まりました。私はその中で生まれ育ち、現在22歳です。高校進学と同時にゴーバルを離れたものの、大学卒業後気づけば再びゴーバルでの生活が始まりました。私が子どもだった頃とはゴーバルの様子も少しずつ変わっていますが、もちろんそこには変わらないものもあります。その1つがマスコバド糖。ゴーバルがマスコバド糖をハム作りに使うようになったのは25年前のことです。そして、今でもゴーバルではマスコバド糖が活躍しています。ソーセージの生地やハムのつけ込みダレなど、砂糖を入れる製品のすべてにマスコバド糖を使っています。

タイで気がついたこと

ゴーバルの工房でマスコバド糖を使っていたため、私が物心ついた頃、家には当然のようにマスコバド糖がありました。おそらく、私が生まれて初めて口にした砂糖はマスコバド糖だったと思います。小学生の時、友達のお弁当を見て、卵焼きやウインナーの色が明らかに違うことを不思議に感じました。全体が茶色っぽくてなんだか地味な自分のお弁当が恥ずかしくて、いつも隠しながら食べたものです。

しかし大学に在学中、タイに行く機会が与えられ、タイの山奥の農村で2ヶ月ほど村人と生活を共にしました。農村に暮らす村人たちの知恵の深さ、お金では計れない生活の豊かさを目の当たりにした時、なぜか私は自分の原点に返ったような思いがしました。複雑に連鎖する自然の中で、人びとはその自然の恵みをあるがままに享受し、そして感謝して生活をしていました。自分にとっては異文化だと思っていたような生活に、私はとても懐かしさを感じたのです。

自然の力と恵みがもたらすもの

自分の原点にあったのはゴーバルのハムであり、マスコバド糖であり、自分の家の食事でした。そこに共通しているものは、自然の恵みをできるだけそのままの形でいただくということです。その素材の力を失わせることなく、最大限に生かしたものを食べることこそ、私たちにとって最も贅沢な食事ではないでしょうか。そう考えてみると、砂糖キビからできているマスコバド糖が茶色いことや、豚肉やマスコバド糖、塩、水、香辛料、トマトなど自然のものだけが入ったゴーバルのハムやソーセージが鮮やかなピンク色でないことは、何も不思議なことではありません。自然が育んだひとつひとつの素材の持っている栄養やうま味の邪魔をしないように気をつけながら、食卓まで届けられたらいいなあと思います。

最後に、私がマスコバド糖を信頼している大きな理由があります。私が3歳くらいの頃、アトピーのような湿疹が体にできたときに、母が毎晩マスコバド糖を入れた梅肉エキスジュースを飲ませてくれました。そのおかげで、私のアトピーはすっかり治ってしまいました。こうして自然の力を私の元に届けてくださる方々との繋がりが今も昔も変わらずあることを本当に幸せだと感じます。■

ソーセージ作り。

《『山のハム工房 ゴーバル』さんのHP》 **http://gobar.jp/**
ハムやソーセージなどが注文できます。

Voice from APLA partners

From Negros, Philippines【ネグロスより】

カネシゲファーム・ルーラルキャンパス（KF-RC）の適正技術

ネグロス島のKF-RCには、様々な適正技術が導入されています。今回はそちらをご紹介します。敷地面積5haのKF-RCの中には丘があります。その丘の上側には豚舎が、下側には5槽に分けられたタンクが設置されています。ここに取り付けられたものがひとつめの適正技術です。

①1番目の密閉された槽に豚舎から流れてくる糞尿を溜める。この貯蔵タンク内で汚泥からメタンガスが発生。

②1番目の槽でメタンガスが発生した後の汚泥の消化液は2番目のタンクに流れ込み、残りの3つの槽（BM製造タンク）を使って製造されるBM活性水の原料となる。

③残り3つのBM製造タンクでは、その消化液が混ざった水を曝気させ、BMW技術を用いて微生物の働きを生かし、水を浄化させていく。

浄化途中の水は液肥にもなり、3番目の槽で出来上がったBM活性水は家畜の飲用水に添加したり、畜舎に散布します。KF-RCでもBM活性水は既に活用されていて、作物や家畜が健康に育つと研修生たちも驚いています。一方、1番目の密閉タンクから発生したメタンガスは、プラスチックの袋に溜められ（写真参照）、バイオガスとしてセミナーハウスの台所で使用するガスコンロの燃料となり、約10人分の料理が作れます。

二つ目の適正技術が、自動揚水器（詳しくはハリーナ06号P5参照）です。1メートル程度の段差を利用し、その水圧で水を高台まで上げるという仕組みです。水を利用するだけなので、外からのエネルギーを必要とせず、環境汚染もありません。KF-RC内の低いところにある泉と川から水を上げ、20メートル上にあるセミナーハウスでの利用と農業用水とにそれぞれ使い分けています。昨年12月からフィリピンはエルニーニョで8ヶ月も雨が降っていませんでしたが、KF-RCではこの技術のおかげで、24時間水に困ることはない状態でした。

3月には北部ルソンの仲間もこの自動揚水器を視察しに来て、将来自分たちも設置したいと話をしていました。こういう適正技術を将来、北部ルソンや東ティモールなどにも適用させていけたらと考えています。（APLA事務局長：吉澤真満子）

液肥が溜まるタンクとBM活性水を製造するタンク5槽。

BM活性水は堆肥を製造する際にも使っています。

メタンガスが溜まったプラスチックの袋。

動揚水器。左が川から引いた農業用水用で、右が泉から引いたセミナーハウスで使う用。

“APLA Forum 2010 感じるアジア”が無事開催されました。

5月22日の第3回総会の後には、“感じるアジア”が開催され、見る、聞く（聴く）、歌う、踊ると、アジアを感じるフォーラムとなりました。

アジアや日本を歩きながら写真を撮る山本さん。戦争や貧困、災害の現場を撮影しながらも、人間はへこたれないんだ、ということを実感し命が失われていくこと、つまり「死」は「生」へのイメージが伝わらないと分からないと思ったそう。山本さんの写真と語りは、私たちが忘れ始めている命の重みや、人間のあるべき姿などをもう一度思い出させてくれるような時間でした。

東ティモールで出会った曲を熱唱してくれた小向定さん。やさしいメロディーで会場を包んでくれました。途中、準備してくれた歌詞カードをもとに、会場の皆さんと歌いました。隣に座っていた方が、フォーク時代を思い出す、とおしゃっていましたが、初めて会った人たちが一緒に歌を歌うのは心が和みます。

最後には、参加者全員が輪になってテベテベ（東ティモールの伝統的な音楽と掛け声で踊るもの）で終了。アジアへ行くと歌と踊りはセットのようなもの。そこで体を動かして笑うと、自然と人びとの気持ちが通じ合ったりしている。共同代表の3名とBMW技術でお世話になっている秋山さんにもパーカッションやジャンベ奏者としてお手伝いいただき、大盛況の内に終わりました。

編集後記

本号の越田論文がいうように、一体政権交代とは何だったんだという状況が続いています。あらゆることを、物事の根っこからとらえる作業がとても大切などだと、ODA特集を編みながら痛感しました。いま、「成長」そのものを問い直す特集ができないか、と考えています。（大野）

7月の選挙戦では、「元気な日本」、「いちばんの日本」、「強い日本」などのポスターを目にするが、なぜかピンと来なかった。今号の特集は、今日本が世界の中でどのような立ち位置にいるか、そして、そこで問われているあり方は何なのかを改めて考える機会となった。かつての成長路線ありきと同じような方向に向かっても結果は見えているのでは？　どんな未来を望み創るのか、フィリピン側からひとつの答えをもらったような気がする。（吉澤）

KF-RC研修生たちのレポート全文をHPに掲載しています。人が成長していく様を見るのは、うれしくもあると同時に羨ましくもあります。

また、前号のTopicsで紹介した村上園さんのお茶の取扱いがAPLA SHOPで始まりました。いろんな種類を取り揃え（吉福茶（なんと国産のプーアル茶）も！）、自信を持っておすすめします。どうぞAPLA SHOPを覗いてみてください。（松田）

ハリーナ HALINA

2010年夏号　vol.02-no.09
2010年8月1日発行

［編集長］
大野和興

［編集者］
吉澤真満子、松田麻衣子

［表紙写真］
長倉徳生

［デザイン・制作］
十年舎

［編集・発行］
特定非営利活動法人APLA
（APLA／あぷら：Alternative People's Linkage in Asia）
〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
tel. 03-5273-8160
fax. 03-5273-8667
e-mail info@apla.jp
URL http://www.apla.jp

［印刷］
株式会社セイズ

APLA web siteでは、本誌に掲載されている写真の一部をカラーでご覧いただけます。
http://www.apla.jp/05/05_halina.html

【事務局だより】

事務局の動き（2010年5月〜2010年7月）

5月 7日	ATJと一緒に『世界フェアトレード・デー』のイベントに野川が参加しました。
5月 20日	『APLA ／あぷら公開講座・農と食を考える』第2回を開催しました。
5月 22日	第三回総会開催。
5月 22日	APLA Forum 2010「感じるアジア」開催。
5月 25日	明治学院大学にて、吉澤が授業を行いました。
5月 26日	カカオ・パームオイル研究会・第1回目を開きました。
6月 1日	早稲田大学にて、野川が授業を行いました。
6月 3日	沖縄・緊急意見広告報告集会に参加し、APLAを代表して野川がメッセージを伝えてきました。
6月 6日、7日	APLA事務局で白州郷牧場を訪問しました。
6月 12日	フォーラム・アソシエの総会に吉澤が参加しました。
6月 15日	和光大学にて、大橋が授業を行いました。
6月 17日〜	8月6日までの予定で野川が東ティモールへ出張に行っています。
6月 17日	『APLA/あぷら公開講座・農と食を考える』第3回を開催しました。
6月 22日〜26日	株式会社匠集団そらが、KF-RCに設置されたBMWプラントの最終確認のためネグロスを訪問しました。
7月 15日	『APLA ／あぷら公開講座・農と食を考える』第4回を開催しました。
7月 26日〜 8月 2日	APLA会員・グリーンコープ共同体の青少年ネグロス体験ツアーを行い、大橋、吉澤が同行しました。

事務局からお知らせ

5月より、野川未央がAPLAのフルタイムスタッフとなりました。よろしくお願いします！

Bondia! 5月から専従スタッフになりました、野川未央です。現在東ティモールに滞在して、今後のAPLAの活動に向けた調査＆話し合いの毎日を送っています。
ご報告は改めて。どうぞよろしくお願いします。

ハイチの地震被害・災害支援募金にご協力ありがとうございました。

2010年2月より呼びかけておりましたハイチ地震への緊急支援ですが、6月15日で受付を締め切りました。以下が募金報告となります。

ハイチ地震被害・災害支援募金　1,569,001円

6月25日に日本キリスト教協議会（NCCJ）へ振り込みました。世界規模で緊急救援を行っているACTへ送られます。皆様の温かいご支援どうもありがとうございました。

APLAでは会員さんへメーリングマガジンを配信しています。

APLA会員は現在330人いらっしゃいますが、メールマガジンに登録されている方は151名です。まだ登録されていらっしゃらない方は、ぜひ事務局までご連絡ください。よろしくお願いします。
（問い合わせ：info@apla.jp）